

# 質と魅力で目指す日本一幸せを感じられるまち 基盤は里山里海の循環システムと市民の地域愛

## 震災を乗り越え開催した 《奥能登国際芸術祭》への思い

地域の魅力や特色を全国発信するとともに、新しい人の流れを生み出し、地域活性化や交流人口の増加などに資する手法として有効な芸術祭開催への機運は、近年、各地で高まりつつある。

そうした状況下、平成29（2017）年から、石川県珠洲市全域を舞台に開催されるようになった《奥能登国際芸術祭》（3年ごとに開催するトリエンナーレ方式）には、1回目にして11の国と地域から39組のアーティストが参加。50日間（9月3日～10月22日）の会期中に、当初目標の倍以上、人口の5倍以上の約7万1000人も鑑賞者が、国内外から珠洲市を訪れた。

2回目に当たる《奥能登国際芸術祭2020+》は、本来なら令和2（2020）

年開催の予定だった。しかし、コロナ禍のため開催は翌令和3（2021）年に1年延期。会期も当初は51日間（9月4日～10月24日）の予定が、会期中に12日間の延長が決定され、63日間となった。コロナ禍特有の各種制限の下に実施されたための、臨時の措置だった。一方で、アーティストは1回目より多い、16の国と地域から53組が参加。感染防止や密を避けるための会場設営など数々の制限があったにもかかわらず、約4万9000人も鑑賞者が、国内外から珠洲市を訪れ芸術祭を楽しんだ。

そして迎えたのが、令和5（2023）年9月23日～11月12日まで51日間にわたって開催された《奥能登国際芸術祭2023》だ。本欄では、開幕から5日目の9月27日に珠洲市を訪問。芸術祭会期中の市内のにぎわいを体感するとともに、芸術祭をはじめとする珠洲市の地域活性化施策・事業などの現状と今後について伺うべく、泉谷満寿裕

市長へのインタビューを実施させていただいた。

「前回はコロナ禍による1年間の延期と、コロナ禍特有の制限がたくさんある中で開催となり、芸術祭の運営にはさまざまな苦労がありました。そこで今回は反転攻勢に向け、意気込んでいた矢先の5月5日、ご承知のように珠洲市で最大震度6強を記録する『令和5年奥能登地震』が発生してしまいました。

いずみや ますひろ  
泉谷 満寿裕  
珠洲市長



本稿は、昨年5月に発生しました「奥能登地震」からの復興に向けた思いについて、昨年9月に泉谷珠洲市長からお伺いしたものを取材当時の原文のまま掲載させていただきました。



塩田近くの旧保育園の一室に常設される『時を運ぶ船』(塩田千春・作)は、塩づくりに生涯をささげた地域の人々へのオマージュ作品



日の出と日の入りの舞台である海を門(神域の門でもある鳥居)になぞらえた『自身への扉』(ファイグ・アフメッド・作)



旧・能登線の蛸島駅跡に作られた『なにか他にできる』(トピマス・レーベルガー・作)は、地域の過去・現在・未来への旅の入り口だ



旧・能登線の珠洲駅跡(現・道の駅すずなり)に残るホームを、展示とパフォーマンスの場になぞらえた『おはなしの駅すず』(佐藤悠・作)

珠洲市の世帯数は6000弱ですが、全棟(40棟)から半壊、一部損壊まで含めた家屋の被害は、総計3000件近くに上っています。全世帯の半分が何らかの被害を受けているわけで、芸術祭の開催に関しても、今年は無理だという意見が大半を占めました。

もちろん、まずは被災された市民の皆さまの一日も早い生活の再建と、復旧に全力を傾注しなければいけない。それが大前提なのは言うまでもありません。その上で、芸術祭には多くの方たちが、それぞれの立場で開催に関わってくださっています。

市内はもとより、国内外の観光関連の皆さまも、今年の芸術祭はどうなるのかと固唾をのんで見守っておられたはずで、そうしたものもろのことも含め、震度6強の地震の発生から間もない5月中には、最終決断をしなければいけない状況があり、そこは非常に苦慮したところです。最終的には、開幕を3週間延期して開催する線には、落ち着きましたが、それを発表した当時は、賛否両論というより、むしろ批判の方が多かったです。中には『泉谷は、だらびるか!』という声もありました。『バカではないか』という方言です(笑)

そう苦笑する泉谷市長だが、市民と同様に反対する議員に対しては、次のように説得したという。

「もちろん、被災した方たちの一日も早い生活再建、復旧に向けて、全力を尽くします。しかし、復旧のみに専念し、行政も市民も下を向いてばかりいたら、珠洲市は地震で壊れた上に、さらに地域の活力も経済も全て壊れてしまうのではないだろうか。」

復旧の先の復興に向け、何か目標がないと踏ん張れないし、前を向けないのではな

いか。だから《奥能登国際芸術祭2023》を復興への光として、ぜひ開催したい」  
《奥能登国際芸術祭2023》を3週間延期して開催すると発表した後の反応は、しかし、批判ばかりではなかった。  
会期中に行われる「さいはての朗読劇」う



令和5年5月5日に発生した「令和5年奥能登地震」。傷痕はまだ市内各所に残されているが、懸命な復旧作業が続いている



つつ・ふる・すず」で主演を務める俳優の常盤貴子さんが、北國新聞に掲載された芸術祭のラッピング紙面(広告)や、同紙に連載中のエッセー『月がきれいですね』などに、被災した珠洲市民への応援メッセージを寄稿。さらには、復旧中の状況下に開催される《奥能登国際芸術祭2023》への期待と、応援メッセージを寄せてくれた辺りから、「空気が少し変わってきたように思います」と泉谷市長。

「能登の海や里、塩田などを舞台にした、珠洲市でのロケも含むNHKの朝ドラ『まれ』に出演された常盤貴子さんは、珠洲市民にとって、特別な思い入れのある俳優さんです。常盤さんご自身も、そのときに初めて足を踏み入れて以来、珠洲の魅力を個人的に発信してくださっています。そして、初回の芸術祭では、2泊3日の旅程で、全てのアート作品を鑑賞されました」

常盤貴子さんは《奥能登国際芸術祭2023》の開幕を2カ月後に控える令和5年7月、金沢市で開催されたプレイイベントにも出席。報道によれば、「珠洲に行くたびに笑顔になれる」「珠洲は私にとって特別な場所」「その特別な場所にアート作品が点在している姿や景色は唯一無二のもの」という趣旨の発言をしている。

以上のような経緯で、開催を無事迎えた《奥能登国際芸術祭2023》。泉谷市長は最初の週末を利用し、各会場を回ったという。

「やっぱり開催して良かったと心から思いました。市外から来られた鑑賞者や受付ボランティアの皆さんも笑顔。市民の皆さんや職員たちも笑顔。多少無理しても芸術祭を開催したかったのは、参加する全ての方に楽しんでいただきたいからですし、何よりも市民の皆さんには、このまちに暮らしていることに幸せを感じていただきたかった。それが最大の目的なのですから」

### 地域活性化の要諦は「質と魅力を高めること」にあり

珠洲市生まれの泉谷市長は、大学を卒業後、大手証券会社への勤務を経て、平成7(1995)年、31歳で珠洲市へUターンし、江戸時代に創業の家業(菓子舗)を継承した。さらに地元の食料品卸会社代表取締役などを経て、平成18(2006)年6月実施の市長選に出馬して当選。本年度5期18年目を迎えている。

「昭和29(1954)年の市制施行直前、昭



7月から9月まで各地区で行われるキリコ祭り(写真は宝立地区)。各家庭が客人のためごちそうを用意する「ヨバレ」は能登独特のもてなし文化



珠洲市で1000年前から続く揚げ浜式製塩(ろ過用の塩田)



珠洲市の漁獲高の90%を水揚げする蛸島漁港は、珠洲市を代表する海の幸の供給源だ

和25(1950)年の3万8157人が珠洲市の人口のピークで、本年8月末の段階では1万2706人となり、ピーク時の約3分の1まで減少しています。今こそ人口が激減し、過疎化が進みつつありますが、珠洲は本当に良いところで、実はすごいところでもあります。海上交易が盛んな時代には、都の



奥能登の厳冬期の風物詩、強風が生み出す「波の花」(真浦海岸)



11月上旬から市内の水田や池に飛来するコハクチョウの群。珠洲市は渡り鳥の貴重で安全な避寒地となっている

文化も海を通じて直接入ってくるなど、近世までは、日本海側の文化的にも経済的にも、まさに最先端の地でした。

そうした歴史の積み重ねの中から多様な文化が育まれ、現代にも伝わっている。能登半島全域が世界農業遺産に認定されているように、自然環境と生活環境が今も絶妙に循環しています。

そのような土地柄を持っているにもかかわらず、人が出ていくばかりで、戻ってこないのはなぜなのか。私はUターンしたときからずっと、そんな歯がゆさ、悔しさを持っていました。私がそもそも市長選に出馬しようと考えた原動力も、自分たちの世代の努力で、こうした現状をなんとかしたいと考えたことにありました」

珠洲市をはじめとする能登半島全域は、平成23(2011)年6月、「能登の里山里海」として、新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」と共に、国連食糧農業機関(FAO)から日本初の「世界農業遺産」に認定された。世界農業遺産としての「能登の里山里海」がユニークなのは、従来の認定地のようには、認定対象が特定の作物や、内陸部を中心に展開される農業の在り方だけに限定されてはいない——ということだった。

地域全体で行われている伝統的な農林漁法全般と、それに付随する伝統技術、独自の生活習慣(人々の暮らし)や祭礼などの農村文化、それらを色濃く反映する里山・里海の景観、生物多様性を今も維持する優れた自然環境など、能登半島全体の「地域(循環)システム」の継承と保全の現況が、認定の構成要素になっている。

とりわけ、能登半島の先端に位置し、市域境界線の3分の2以上を海に囲まれ、1000年前から続く、貴重な揚げ浜式製塩などの伝統も保持されている珠洲市は、能登半島の里山里海が持つ地域の循環システムが、色濃く残されたエ

リアの一つとの定評がある。

世界農業遺産の認定理由は、まさに、珠洲市をはじめとする能登半島が「特別な場所」であることを物語っていると云えるだろう。

泉谷市長は、過疎化の進む地元を昔日の「質と魅力」を高めることが最重要」と考え、就任直後から精力的に動き始めた。そして、地域の質と魅力を高める事業として、最初に取り組んだ事例の一つが、能登半島の先端に位置する狼煙地区の活性化だった。

「禄剛埼灯台で知られる狼煙地区は、私の子どもの頃、市内では観光客などで最もにぎわっている地区の一つでした。ところがUターンした頃には、驚くほどに寂れていました。

半面、狼煙には在来種である大浜大豆があり、これを使って地域おこしができないかと、地元の方たちが頑張っていました。具体的には、大浜大豆で作った寄せ豆腐や納豆を、冬場に開催する年に1回の食のイベントで売っていた。それはすごい人気で、寄せ豆腐も納豆も、アツという間に完売する。売り上げもかなりのものでした。しかし、地域の人たちに聞くと、その利益を利用して毎年、みんなで慰安旅行に行っているだけだということです。

年に1回のボーナス的な楽しみで、それはそれで意義はあったわけですが、私は『それはもったいない。それを通年やり続けたら、



さいはてのまち・珠洲市のさらにさいはて・狼煙地区に立地する「道の駅狼煙」。特産大浜大豆と揚げ浜式塩田の天然にがり使用の豆腐が評判だ

地域が変わるのではないですか」と持ちかけました」

泉谷市長がその際に着目したのは、豆腐や納豆を売っていた地元のレストハウスの存在だった。

「かつて観光でにぎわっていた頃には地域の人たちが所有していた施設ですが、過疎化とともに維持が困難になり、所有権は市に無償譲渡されていました。市の財産である以上、どこかが壊れば市の予算で修繕しなければならぬ。それを繰り返してきたわけで、それももつたいない。いつそ取り壊して、道の駅にしたらどうか。そこで通年売れる特産大豆の豆腐や納豆を目玉にしたら、県内外から観光客がまた来てくれるのではないかと、提案したわけです」

この提案を受け入れた地域の有志たちは、市外の豆腐製造販売会社に毎週末通って修業に励むなど、質をより高め、コンスタントに生産するための努力を積み重ねてくれた。珠洲市もその間に農林水産省に働きかけて補助金を引き出し、レストハウスに隣接していた駐車場も買収するなど、着々と準備を進めていった。また、その話を石川

県農林水産部に持ちかけたところ、面白い事業だからと、県も補助金を出してくれることになった。

かくして、市長就任直後の平成18年に狼煙地区を訪ね、地域の人たちとにぎわいを取り戻すための語らいをしてから3年、平成21（2009）年のゴールデンウィークに《道の駅 狼煙》はオープンした。

「自分が子どもの頃に見た光景に近いにぎわい、道の駅から歩いて15分ほどの緑剛埼灯台まで、次から次へと途切れずに続く人波を見て、思わず涙が出ました。やればできる。この成功体験が、私の中では、その後さまざま取り組みの出発点になっています」

### 増大する関係人口や移住者、そして新たな活性化の始まり

既存の施設をリニューアルし、にぎわいを取り戻した取り組みの事例としては、平成17（2005）年に廃線となった「のと鉄道能登線・旧珠洲駅跡」を活用し、かつてのホームを温存したままに、平成22（2010）年に整備した《道の駅すずなり》や、市所有の旧国民宿舎「能登きのうら荘」をオシャレな「海の見えるコテージ（全8棟）」へと変身させた《木ノ浦ビレッジ》などの成功事例もある。

このうち《道の駅すずなり》は、塩田で生産した天然塩などをはじめとする特産物を販売するほか、市バス（全線無料のすずバス）



さいはての地・珠洲をさまざまな角度から体験できる「奥能登すず体験宿泊施設 木ノ浦ビレッジ」を運営する主体はUターン、Iターンの女性たち

や外部と結ぶ北鉄奥能登バス、能登空港と珠洲市を結ぶ「能登空港（のと里山空港）ふるさとタクシー」などのターミナルとして機能している。また市の観光案内所を設置することで観光拠点としての機能も備えており、《奥能登国際芸術祭2023》においても、観光客からはランドマーク的に捉えられ、活用されている様子が見て取れた。

また、《木ノ浦ビレッジ》のコンセプトは「奥能登すず体験宿泊施設」。奥能登の食材を活用した夕食や「一汁三菜」の朝食を楽しめるほか、研修棟やものづくり体験のできる工房が併設されている。ここで働くスタッフは、Uターンの女性や、関係人口から移

# 珠洲市

(石川県)

## 市 政 ル ポ

住者へと移行したイターン女性が中心になっているところが特徴的だ。

また、外部の活力と連携した事例としては、金沢大学とのコラボで平成18年から始まった、能登学舎での多彩な取り組みが挙げられる。

「私が市長に就任して2カ月後の平成18年の夏、金沢大学から、統廃合されて空いている小学校の校舎を活用させてもらえないか、そこで『能登半島里山里海自然学校』を開設したい、という申し入れがありました。この事業は金沢大学が地域貢献の一環として模索していたもので、奥能登2市2町（珠洲市・輪島市・穴水町・能登町）の里山・里海の保全活動、環境に配慮した農林水産業の振興策の提言などに尽力することを目的とする計画でした。

平成19（2007）年には、金沢大学・石川県立大学・奥能登2市2町で『地域づくり連携協定』も締結。日本海に面する校舎（能登学舎）で、能登の里山の基礎研究や保全活動、都市と農村との交流、地域振興のためのリーダー（人材）育成など、大学と地域との連携による多彩な教育研究事業が行われ、取り組みの枝葉をたくさん伸ばしつつ、現在まで続いています」

この取り組みの参加者は、当初、奥能登2市2町の職員や、農協・漁協・森林組合の職員などが中心だったが、年を経るごとに、外部からの参加者が増え、東京から飛行機で能

登まで通い、参加する人も出てきたという。また「そうした人々は珠洲市の関係人口となっただけでなく、一部の人は移住し、珠洲市に根を下ろす事例も出てきました。今思うと、金沢大学とのこの連携事業が、外部の人たちがどんどん珠洲市に入ってくるようになったことも含め、人口減少対策としての、さまざまな取り組みの原点となっている」と泉谷市長。

以上、ご紹介してきたように、泉谷市長が就任して以降、珠洲市では、地域の質（潜在力）と魅力を高めようとする内側からの力と、その質と魅力に引かれ、もたらされてくる外部からの働きかけとが相まって、さまざまな変化が生じてきている。

初回開催からの6年間で、子育て世代中心に348名もの移住者をもたらし、《奥能登国際芸術祭》は、そのシンボルであり、同時に「単なるイベントでない、さいはての珠洲市からの人の流れ、時代の流れを変える運動」（泉谷市長）と言えるのではないだろうか。さらに、令和4（2022）年1月



世界的建築家・坂茂が設計した「潮騒レストラン」（令和5年完成）は食事でもできるアート作品



ミシュランガイドの三ツ星ホテル「よしが浦温泉・ランプの宿」は創業約450年。中世末期の珠洲から続く絶景の宿は珠洲観光のシンボルの一つ

にSDGs未来都市に選定された珠洲市は、同年8月、天然記念物トキの野生復帰に向けた放鳥候補地にも選定された（選定は能登半島4市5町対象）。令和5年8月には、引退後の競走馬が余生を過ごすための牧場をつくるという新たな取り組みも、民間を中心にして始まっている。

珠洲市の「まちづくり総合指針」の目指す都市像は「日本一幸せを感じられる珠洲市」。珠洲市の多彩な現況を見れば見るほど、《奥能登国際芸術祭》が回を重ねるごとに常設展示のアート作品を地域に増やしていくようなあんなに、市民や関係人口にとっての「幸せの種」も一つずつ、増えていくこうとしているかのようである。

（取材と文＝遠藤隆／取材日＝令和5年9月27日）